

小説『スンドアリー』におけるカールサーの概念

岡 口 典 雄

パンジャービー語の詩人・小説家・伝記作家バーイー・ヴィール・スィング(1872～1957)の小説『スンドアリー』は1898年に出版された。この作品はパンジャービー語の散文体による最初の小説である¹⁾と一般的に評価され、パンジャービー語による出版物としては最大の発行部数を記録している²⁾。

1893年にスィング・サバー運動に参加し、1894年にカールサー・トラクト協会を設立した作者の著作活動の原点はスィック教復興への熱意であった。「この著作の目的は読者に一時的な娯楽を提供することではなく、スィックにその歴史を教え、真の教徒たるべく感化することである」³⁾と自身は説明している。したがってこの教化至上的色彩の強い作品は、作者が読者に直接「苦境に陥っても信仰を貫くスンドアリーを見て、自らを省みよ」⁴⁾などと1ページ以上にわたって自分の意見を説教し、「さて、またスンドアリーの話が続けよう」⁵⁾と展開するような、近代小説らしからぬ技法をも含んでいる。しかしその宗教的動機に文学的動機が加わり、偶然結合した結果、『スンドアリー』はパンジャービー文学に散文小説のジャンルを開拓する機会を与えることになった⁶⁾。

その後1899年には『ビジャイ・スィング』、1900年には『サトワント・コウル』と連続して散文小説が出版された。これら三部作はいずれもほぼ同じ歴史的背景を舞台として、受難に耐えるスィックの信仰の勇気と尊さを描いている。三部作の描く時代はムガル帝政末期の1726年から1761年に至る激動の35年間である。そのうち『スンドアリー』の描く時代は26年間に及ぶ。すなわちザカリーヤ・カーン(在位1726～1745年)がラーホールの太守となった1726年に始まり、ヤーヒヤール・カーン(在位1745～1748年)ミール・マンヌー(在位1748～1753年)と続く時代を舞台に展開し、1752年の宰相カウラー・マルの死に続く主人公の死を以て終わる⁷⁾。

スィック教の復興のための教化の一手段として著わされた『スンドアリー』には、当然スィック教に関する多くの用語が含まれている。スィック **sikk**^h (170), カールサー **k^hālsā** (109), ジャッター **jatt^hā** (26), パート **pāt^h** (20), アムリト

ammrit (19), ランガル langar (12), サトグル satigurū (11), グル・グラント・サーヒブ gurū gramṡ sāhib (11), グルマター gurmata (6), ジャプジー japuji (5) などがその主な用語である。() 内の数字は作品の全文中に含まれる頻度数である。シックの170に次いでカールサーが109と圧倒的に多く、作品全体の基盤を成す主要概念であることがわかる。カールサーは本来「純粋なもの」の意味で、グル・ゴービンド・スィングが、1699年に創設した同胞集団の名称として採用したものである。小説『スンダリー』におけるカールサーの概念は次の7種にまとめられる。

① [世俗権力・血縁を超えた同胞集団] カールサーは、人々を虐げる世俗権力と血縁に縛られた理不尽な因習にこそ罪があると主張している。したがってカールサーが世俗権力・血縁を超えた、個人の意志の選択による同胞集団であることを物語の展開の前半で強く印象づけている。

② [戦闘能力の優れた軍事集団] 機動力や戦闘における技量など、カールサーの軍事的能力を個人及び集団のレベルで傑出したものと描いている。

③ [民衆を助ける反権力集団] ムガルの支配階級を好色で残忍な悪者そしてヒन्दウーの民衆を戦う力のない臆病者と設定する一方で、シックについては慈悲深く不動の信仰心を持った者と描いている⁹⁾。この一面的なキャラクター設定ゆえに、確かに『スンダリー』は歴史小説としては写実性に乏しく、政治経済的背景を除外した単なる宗教的抗争としての筋立てに終始しているかのように見える。しかしカールサーが戦った相手はムスリムではなく、彼らを含めた民衆を苦しめるムガル政権である。カールサーは信仰の枠を超えて民衆の側に立つ反権力集団であることを対話の中で語らせている。

④ [厳しい弾圧を受けるゲリラ集団] 厳しい弾圧を受け、森に潜むゲリラ集団としてのカールサーを描き、極限的状况に耐える力を印象づけている。またシックに対する無差別殺戮に際しては、信仰に背くことなく従容として死に臨む強さを描いている。

⑤ [応報刑を行う冷酷な集団] 作者は、史実及びフィクションの両面から、暴虐に対しては応報の刑で処するのがカールサーの掟であることを描き、民衆の側に立つ戦闘集団としてのカールサーの正義感の強さを強さを強調している。それは同時に、この作品が勧善懲悪礼賛のインドの伝統的物語作法をそのまま継承し、娯楽を提供する大衆小説としての性格を含んでいることに拠ると言えよう。

⑥ [男女平等の進歩的集団] 15世紀即ち教祖ナーナクは、女性たちの低さを

敏感に意識し「女性から我々は生まれ、女性なしでは、何も存在しない。その女性を何故蔑むのか」⁹⁾と述べていた。『スンダリー』では、スンダリーもダルム・コウルも、ムガルに拉致された自分を穢れたものとして受け入れないヒンドゥーの社会に失望しカールサーに入団している。シック教復興への熱意を原点とした作者は、その小説の処女作の主人公を女性とし、男性中心の閉鎖的な社会に対する問題意識を終始一貫して描いている。これはパンジャービー語による著作が、自らの文化に関心の薄い男性に読まれることを期待しない作者が、もともと女性に反響を求めていたためであると考えられることでもできよう。

⑦ [博愛主義に立つ奉仕集団] 非道な権力者に対しては武力をもって立ち向かい、応報刑も辞さない戦闘的な性格と同時に、非戦闘員または負傷兵に対しては敵味方の区別をしない博愛主義的な性格も重要な要素として描かれている。カールサーの博愛主義的性格は、「現世における奉仕の生活によってのみ、人は神の愛を得る」¹⁰⁾という教祖グル・ナーナクの教えに由来する。作者は、スンダリーをこの理想の忠実な実践者として描き、宗教の枠を越えた奉仕集団としてのカールサーの性格を印象づけている。

-
- 1) Narinder Singh Duggal, “**Pañjābi Sāhitt Ikk Paricay**”, New Book Company, Jullundur, 1971, p. 159 2) Kartar Singh Duggal, “A Legend”, Bhai Vir Singh; The Sixth River of Punjab, Guru Nanak Vidya Bhandar Trust, New Delhi, 1972, p. 51. 3) 使用テキスト: **Sundari, K^hālsā Samācār**, Amritsar, 1970, **antakā-** 1 pp. 130-131 4) 同掲書: p. 108 5) 同掲書: p. 109 6) Sant Singh Sekhon, “The Father of Modern Panjabi Prose”, Bhai Vir Singh; Life, Times & Works, Panjab University, Chandigarh, 1973, p. 117 7) Harcharan Singh Sobti, “The Sikh Psyche”, Eastern Book Linkers, Delhi, 1990, pp. 46-47 8) Subhag Sohi, “**Pañjābi-nāval vic Yat^hārat^h-citraṅ**”, The Panjabi Writers Cooperative Society Limited, Ludhiana, 1983, p. 94 9) Guru Granth, Asa, p. 473 10) 同掲書, Sri, p. 26

〈キーワード〉 パンジャービー文学, パーイー・ヴィール・スィング, シック, カールサー

(淑徳巣鴨高等学校講師)